

新型コロナウイルス感染拡大と子どもの生活、学校の役割

春日井敏之(本学教職研究科教授 臨床教育学)

2月27日夕刻、首相の一斉休校要請により、十分な根拠の説明がなされないまま、3月から5月まで全国の小中学校、高等学校、特別支援学校などは、長期休校となり、その影響は大学にまで及びました。例年のような卒業式や入学式は行われず、私も文学部の最後のゼミ生15人と一緒に卒業式を迎えることができませんでした。この長い休校期間は、先生方の尽力によってオンライン授業などの取り組みが展開され、実践の工夫も生まれました。しかし、本来ICTの活用は対面授業の補完的なツールとして提案されてきた点は、再確認しておく必要があります。

一斉休校の期間は、「学校に通うこと」について、子ども、学生、保護者、教職員、教育行政など、教育に関わるそれぞれの立場から、意味を捉え直す重要な機会となっていったのではないのでしょうか。私は学校の機能について、①子どもたちが課題を探究し深め合う協同の学びの場、②子どもたちが出会いと交流によってつくっていく協働の生活の場、③家族の仕事や生活を支える場、④子どもにとって安心、安全なセーフティネットの場、⑤どんな子どももかけがえのない存在として受け入れてもらえるケアの場として重要な役割を担っていると考えています。

学校再開以降、マスクの着用によって表情が読み取りにくく話づらい、ソーシャルディスタンスによって友だちや先生と関わりにくい、楽しみにしていた行事、部活の大会などが中止や見直しとなりがっかりしている、休校中の課題提出や6時間目、7時間目に及ぶ授業に追われて疲れているといった子どもたちの様子が多くみられるようになりました。二学期には、息切れする子どもたちが増え、不登校も増加傾向にあります。

だからこそ、学級や個々の子どもに対して、指導、支援、ケアの視点を大切にして、丁寧に関わっていきましょう。子どもたちが安心して楽しいと言って通える学校は、家族にとっても支援、ケアの機能を果たしているのです。ちなみに、「指導」は、1970年代～80年代に学

校が「非行・問題行動」で荒れ、いじめ問題も多発していく状況の中で、主として学級、学年、学校における子ども集団を対象にして、教師主導で問題行動への対応を指す言葉として使われてきました。また「支援」は、1995年の阪神淡路大震災以降に、主として集団を構成する個を対象にして、状況に応じた個別対応を指す言葉として使われてきました。スクールカウンセラーの配置もこの年から始まったのです。指導や支援の正当性の根拠は、子どもの最善の利益である「いのち、権利、利益」を守ることにあります。

また、「ケア」という言葉は、社会福祉分野で使われてきたのですが、学校教育の場で使われるようになったのは、2011年の東日本大震災以降でした。指導、支援以前に、子どもたちの深い悲しみや傷つきに寄り添い、かけがえのないいのちを丸ごと受けとめていく姿勢を指す言葉として使われてきました。大切な家族を失い、育ってきた家や故郷までも失ってしまうような津波と原子力発電所爆発といった過酷災害のなかで、子どもたちの傍らで言葉にできない思いも含めて、丸ごと黙って受けとめていくことが大切なケアとなっていきました。深い悲しみや傷つきを抱えた子どもたちの姿は、現在の学校にも見られるのではないのでしょうか。

私は、子どもに寄り添うとは、「子どもの生活、感情、願いを一緒に居て、見て、聴いて、感じて、考えて、まるごと受けとめようとする姿勢」と定義しています。これは、教育におけるケアと重なる姿勢です。この姿勢があると、子どもへの分析からではなく、対話的關係から感情や願いを受けとめていくことができます。具体的には、「あなたはどうしたいの?」「お母さんにはどうしてほしいの?」「お父さんにはどうしてほしいの?」「担任の私にできることは何かある?」といった子どもへの問いかけを大切にしていくことです。「何もしてらん!」と言われても、教師や保護者が子どものことをいつも気にかけていることは伝わるからです。そして、本当に必要なときには、子どもは相談してくれるのです。